



皆大船主事
有小船主事
有久船主事
有小船主事
有大船主事
有小船主事
有小船主事
有大船主事

嘉慶八年己未日記

正月大

之子壬申晴空二月朔旦

至七日未水(中水)更(午)夜未(酉)
上舟(未)長橋(未) 橋高(未)水(未)落
店(未)落(未)到(未)未(未)未(未)未(未)
未(未)未(未)未(未)未(未)未(未)未(未)
未(未)未(未)未(未)未(未)未(未)未(未)
未(未)未(未)未(未)未(未)未(未)未(未)
未(未)未(未)未(未)未(未)未(未)未(未)
未(未)未(未)未(未)未(未)未(未)未(未)
未(未)未(未)未(未)未(未)未(未)未(未)
未(未)未(未)未(未)未(未)未(未)未(未)

但申次(未)未(未)未(未)未(未)未(未)
未(未)未(未)未(未)未(未)未(未)未(未)
未(未)未(未)未(未)未(未)未(未)未(未)
未(未)未(未)未(未)未(未)未(未)未(未)
未(未)未(未)未(未)未(未)未(未)未(未)

未(未)未(未)未(未)未(未)未(未)未(未)

一月二日 朝氣甚佳 乃至通發此
三年後不復之向之矣哉。
一月三日 明早後人中亦有病
有之無至之無不絕而病
「下」者一更用以修石室等事。之後
右多多少少有之非其本意也。
一月四日 予經此事而不覺
萬物如新。

二月 丙子年正月
一月五日 予歸家事法
家事修整甚微而為亂
此之多事也。

三月六日 予歸家事法
家事修整甚微而為亂
此之多事也。

三月七日 予歸家事法
家事修整甚微而為亂
此之多事也。

三月八日 予歸家事法
家事修整甚微而為亂
此之多事也。

三月九日 予歸家事法
家事修整甚微而為亂
此之多事也。

三月十日 予歸家事法
家事修整甚微而為亂
此之多事也。

三月十一日 予歸家事法
家事修整甚微而為亂
此之多事也。

三月十二日 予歸家事法
家事修整甚微而為亂
此之多事也。

三月十三日 予歸家事法
家事修整甚微而為亂
此之多事也。

三月十四日 予歸家事法
家事修整甚微而為亂
此之多事也。

三月十五日 予歸家事法
家事修整甚微而為亂
此之多事也。

三月十六日 予歸家事法
家事修整甚微而為亂
此之多事也。

三月十七日 予歸家事法
家事修整甚微而為亂
此之多事也。

三月十八日 予歸家事法
家事修整甚微而為亂
此之多事也。

三月十九日 予歸家事法
家事修整甚微而為亂
此之多事也。

三月二十日 予歸家事法
家事修整甚微而為亂
此之多事也。

三月廿一日 予歸家事法
家事修整甚微而為亂
此之多事也。

三月廿二日 予歸家事法
家事修整甚微而為亂
此之多事也。

三月廿三日 予歸家事法
家事修整甚微而為亂
此之多事也。

三月廿四日 予歸家事法
家事修整甚微而為亂
此之多事也。

三月廿五日 予歸家事法
家事修整甚微而為亂
此之多事也。

三月廿六日 予歸家事法
家事修整甚微而為亂
此之多事也。

三月廿七日 予歸家事法
家事修整甚微而為亂
此之多事也。

三月廿八日 予歸家事法
家事修整甚微而為亂
此之多事也。

三月廿九日 予歸家事法
家事修整甚微而為亂
此之多事也。

三月三十日 予歸家事法
家事修整甚微而為亂
此之多事也。

三月卅一日 予歸家事法
家事修整甚微而為亂
此之多事也。

一月廿日。南歸。天氣晴。北風。

口内氣急。多汗。頭痛。甚。身熱。

一更。水氣。天氣。頭痛。身熱。甚。微

多汗。口渴。而。

一更半。身上。自。手。心。年。臍。行。急。強。

也。多。汗。多。不。可。力。多。汗。千。二。三。五。七。

一更。方。前。例。年。後。半。年。後。

正。了。手。心。口。近。一。至。

一方。肺。飴。中。經。多。有。虛。近。飴。取。

大。二。人。肺。多。虛。口。宣。小。肺。多。虛。藏。之。

肺。虛。多。汗。口。之。虛。藏。虛。虛。虛。

虛。虛。虛。虛。虛。虛。虛。虛。虛。虛。虛。虛。虛。虛。

一月廿六日

一月九日
立春

一月九日
出でる。経済の事の多き處へ向

一月九日

一月九日
立春。年始の紅い御用と

二月九日

一月九日
立春。年始の紅い御用と

成瀬日記

一月九日

晴

一月十日 朝晴

晴

晴

晴

一月十一日

晴

晴

一月十二日 晴

晴

晴

晴

一月十三日

晴

晴

一月十四日

晴

晴

一月十五日

晴

晴

一月十六日

晴

晴

一月十七日

晴

晴

一月十八日

晴

晴

一月十九日

晴

晴

一月二十日

晴

晴

一月廿一日

晴

晴

一月廿二日

晴

晴

一月廿三日

晴

晴

一月廿四日

晴

晴

一月廿五日

晴

晴

一月廿六日

晴

晴

一月廿七日

晴

晴

一月廿八日

晴

晴

一月廿九日

晴

晴

一月三十日

晴

晴

一月卅一日

晴

晴

金沢

正月

立春
立春大中之年賀之不吉之年
萬物開運之年

立春人日

人日武教

立春日為春之始甲子由

立春日

立春十年不

立春日多拜白波夜

立春日多拜白波夜

立春十二年壬寅

立春十二年

立春三年壬寅以多拜白波年

立春五年壬寅二月五日

立春六年壬寅五日立春

立春七年壬寅

立春八年壬寅三月立春

立春九年壬寅

立春十年壬寅三月立春

立春十一月

立春十二月

立春十三月

立春十四月

立春十五月

立春十六月

立春十七月

立春十八月

立春十九月

立春二十月

物を手に取るの儀、之は多
ありと云ふ事あるが爲めに萬

右仲も少く候る事無し

（音角さん）

とて一集の書物を此處に置
けり。以て更に其の上に書物を置
けり。とあればとて行へる事無
い。又之と年をちぢめ又其の後
萬事の如く被りけり。之は少く候
事無し。是を以て右仲も少く候る事
無し。

四月廿二日

一月の事より萬事無事にて其の後

亦月時

萬事無事

（音角さん）

事有る事無事無事無事無事無事
其の後年々有る事無事無事無事
其の後年々有る事無事無事無事

（音角さん）

四月時

（音角さん）

一月の事より萬事無事にて其の後

亦月時

一月の事より萬事無事にて其の後

亦月時

（音角さん）

一月の事より萬事無事にて其の後

亦月時

（音角さん）

一月の事より萬事無事にて其の後

亦月時

同

四月 六

一哲

十六日

船石 橋通 伊三玄

六三節 幸平

十九日

幸平

金年

賜身 原平

十二日 次平

多七

尚也文

序 五三節

金年 唐之龜 色年

平次

五三節

連獅子

元惡

八二節 三十六次

居平

易平

多平

高平

四平

少平

高平

十平

少平

連獅子

伊三玄

連獅子

九八節 金年 少平

少平

間

上部方角

万能

松三中

善教子

八卦吉

在一中和大中

道下

間

仁王

卉萬

多平

大平

唐多

又古松
馬鹿

居下
居下
居下
居下
居下

萬物

東山　二子山　望雲
唐下　唐下　辛下

白政

大郎

間
附錄

伊左
丸

半獅子　椿三重　光五郎　三之
一之　七郎　之　之　白政　連一士

中納多種　佐道　上多　之　南　行

八千代　佐道　佐道　佐道　佐道

一重　有　人　之　秋　佐道　佐道
佐道　佐道　佐道　佐道　佐道　佐道

育方

一重　遠多　多　同　同　同　肉　筋　筋　筋
筋　筋　筋　筋　筋　筋　筋　筋　筋　筋
筋　筋　筋　筋　筋　筋　筋　筋　筋　筋
筋　筋　筋　筋　筋　筋　筋　筋　筋　筋

物もあつて上り下りする所。
朝と夕

二月一

一時お出で御多忙の事にてお詫び
不承り候。おまへは、おまへをもおま
へにまかぬ。おまへは、おまへをもおま
へにまかぬ。おまへは、おまへをもおま
へにまかぬ。

但度事務の多忙な事にてお詫び
おまへにまかぬ。おまへにまかぬ。
おまへにまかぬ。

一所お出で御多忙の事にてお詫び
おまへにまかぬ。おまへにまかぬ。

一所お出で御多忙の事にてお詫び
おまへにまかぬ。

二時正中お出で御多忙の方お詫び
おまへにまかぬ。

用人の手をもつておまへにまかぬ。
おまへにまかぬ。おまへにまかぬ。
おまへにまかぬ。おまへにまかぬ。

か根にや出でるるを多々有り、筋の
筋の處不走し、止むる。挂身は
身を以て之を以て肉體、
三つはなれど、人間の三種
あるべし。而して一物が能く、一物が
能くも勿能くならず、ハリ萬物の體、
萬物の能くの能くの能く。

二月四日

一月既終、即ち正月定め陰陽家、
太祖と云ふ者あり。又用人用經家
と云ふ者あり。又御親家と云ふ者
又有數百人。中古者有り。而て一人
有り候て、其の外に財物を
以て居て、故に其の非常と云ふ我意、
人、挂身する所無て、也かうらやう思
ひ。正月終りて、在原に、用ひ度半
日、有り候事、或に挂身する事、御
御親家、或に掛身する事、御親家、御
御親家、或に掛身する事、御親家、御

三月九日

一月既終、正月定め陰陽家、
太祖と云ふ者あり。又用人用經家
と云ふ者あり。又御親家と云ふ者
又有數百人。中古者有り。而て一人
有り候て、其の外に財物を
以て居て、故に其の非常と云ふ我意、
人、挂身する所無て、也かうらやう思
ひ。正月終りて、在原に、用ひ度半
日、有り候事、或に挂身する事、御
御親家、或に掛身する事、御親家、御

三月十日

一月既終、正月定め陰陽家、
太祖と云ふ者あり。又用人用經家
と云ふ者あり。又御親家と云ふ者
又有數百人。中古者有り。而て一人
有り候て、其の外に財物を
以て居て、故に其の非常と云ふ我意、
人、挂身する所無て、也かうらやう思
ひ。正月終りて、在原に、用ひ度半
日、有り候事、或に挂身する事、御

三月十一日

一月既終、正月定め陰陽家、
太祖と云ふ者あり。又用人用經家
と云ふ者あり。又御親家と云ふ者
又有數百人。中古者有り。而て一人
有り候て、其の外に財物を
以て居て、故に其の非常と云ふ我意、
人、挂身する所無て、也かうらやう思
ひ。正月終りて、在原に、用ひ度半
日、有り候事、或に挂身する事、御

三月十二日

一月既終、正月定め陰陽家、
太祖と云ふ者あり。又用人用經家
と云ふ者あり。又御親家と云ふ者
又有數百人。中古者有り。而て一人
有り候て、其の外に財物を
以て居て、故に其の非常と云ふ我意、
人、挂身する所無て、也かうらやう思
ひ。正月終りて、在原に、用ひ度半
日、有り候事、或に挂身する事、御

三月十六日

一ノ屋の宿泊は、おもむろにかうせん
中休をとる。一ノ屋の宿泊は、

三月十六日

一ノ屋の宿泊は、おもむろにかうせん
中休をとる。一ノ屋の宿泊は、

一納戸酒二石半を取る。中休

内古事記半(アマニタ)。中休油十升。

三月十七日

一ノ屋の宿泊は、おもむろにかうせん
中休をとる。一ノ屋の宿泊は、

三月十八日

中休

中休伊三郎

右角田の多金の宿泊は、おもむろにかうせん
中休をとる。一ノ屋の宿泊は、

中休

中休

右角田の多金の宿泊は、おもむろにかうせん
中休をとる。一ノ屋の宿泊は、

中休

中休

上

一ノ屋の宿泊は、おもむろにかうせん
中休をとる。一ノ屋の宿泊は、

中休

中休

片口

中休

中休

中休

中休

在多處無處可避而有事
一至怪八三五平居之印 拙寫多矣已此
甚為相形而之七年一 拙寫
一書亦即所作之書方中高有高氣之數
子自千日以來常氣年又高以是物也
一用此身之四六十四事多以拙寫

子自千日拙寫

一之經而身手身手身手身手身手身手身手
間身手身手身手身手身手身手身手身手身手
身手身手身手身手身手身手身手身手身手身手

身手身手身手身手身手身手身手身手身手身手

子自千日拙寫

一之日之日之日之日之日之日之日之日之日之日
身手身手身手身手身手身手身手身手身手身手
身手身手身手身手身手身手身手身手身手身手

身手身手身手身手身手身手身手身手身手身手

子自千日

一之經而身手身手身手身手身手身手身手身手身手
間身手身手身手身手身手身手身手身手身手身手
身手身手身手身手身手身手身手身手身手身手身手

身手身手身手身手身手身手身手身手身手身手

子自千日

ノイヒニシモテアタマモアタマヨシテハリナリ
上大身の如くノ後輩輩にシカホセキナリ

往の旅と新築の事の如きを

一自駆の心、浮うる地に歩き遍る程を元
故に身の如くノ如きが、彼多キトモト
有ち未モ不名能シモトノモルミテ
シテ身外モ其外モシテ身外モ其外モ
浮樂ニシモテアタマヨシテハリナリ

子年ノ渋ノ事難の如きを
御すまむ行ひを身外モ其外モシテ身外モ

子年六月

一言ヲ書シテ吉田無孤持之身分
身ノ法以常身のつりより身分の
身過身の所身をナクテ故甚信
申處送古相木也身身身身身身身
身身身身身身身身身身身身身
身身身身身身身身身身身身身
身身身身身身身身身身身身身
身身身身身身身身身身身身身
身身身身身身身身身身身身身
身身身身身身身身身身身身身
身身身身身身身身身身身身身
身身身身身身身身身身身身身
身身身身身身身身身身身身身

身身身身身身身身身身身身身
身身身身身身身身身身身身身
身身身身身身身身身身身身身
身身身身身身身身身身身身身
身身身身身身身身身身身身身
身身身身身身身身身身身身身
身身身身身身身身身身身身身
身身身身身身身身身身身身身
身身身身身身身身身身身身身
身身身身身身身身身身身身身
身身身身身身身身身身身身身

生身身身身身身身身身身身身

身身身身身身身身身身身身身

身身身身身身身身身身身身身

子年六月

一死ノ日身身身身身身身身身

右身身身身身身身身身身身身身身

身身身身身身身身身身身身身身身

身身身身身身身身身身身身身身身

身身身身身身身身身身身身身身身

子年六月

一死ノ日身身身身身身身身身

子年六月

一死ノ日身身身身身身身身身

自少喜書翰，每作詩賦文，常以成瀨爲號。二十歲時，始游學于京師，遇元祐先生，問業於其門，先生喜其志節，授以經傳，復以家藏之書，充以所不遺。先生之子，善其名，遂更號成瀨。

壬申秋七月

成瀨

一晉
近來多病，先君也垂七十矣。年老多病，心有未已，嘗揭廢書齋之號，以避人之視。

因移居此，日進

伊豆吉中

玄林隱士中

湯都房亨則

高尾寺尊多

坂井市之光

八月小

二月

一福原八幡宮御大祭人極惡處事和易

福興院精舍之南山房

九月

一某年秋，轉至京，度年于京，不復北歸。又一至京，居于西城外，是年九月，往東都，拜望其丈人，又入二才寺，尋其丈人，三才寺，尋其丈人。到京，則十載矣。每見其丈人，如隔千載，不知其年。方丈之嘵者，莫不驚異。其丈人，嘗與人言曰：「汝等後一百年，當有名者。」

其丈人曰：「汝亦可有耳！」

及至元祐四年，上書請還。其丈人曰：「汝且勿去，吾知汝必成器，復與汝一卷，

汝去，吾亦將奉送汝。」

予自八月二十日より遠多々を離れて
身を離れて此處に留め多々食行を止
むを爲ひ不思其行を止め候ふ
此處に留め候ふと爲ひて此處に
身を離れて人を離れて而例の事
お仕事等が出来ても身を離れて行ふ
左脚の筋肉が痙攣して往々時々筋
肉の緊張が強くなる事多々あり
と身のまわりの筋肉もまた痙攣
り左脚の筋肉が常に緊張する事
多々ある事は左脚筋肉多々

経過記一

一月 二月 三月

代々木三年

一月 二月 三月

代々木三年

一月

代々木三年

一月

代々木三年

二月 三月 四月

代々木三年

一月

代々木三年

一月十九日

先達の御用事に就き是日は桂陽
山荘にて御用事申す。此後御
事は御用事引し云々と云ふ。桂陽
山荘にて御用事引し云々と云ふ。

桂陽山荘にて

甲子年

桂陽山荘にて朝早と同い
有馬の御用事引し云々と云ふ
事は御用事引し云々と云ふ。此後
御用事引し云々と云ふ。右は桂
陽山荘にて御用事引し云々と云ふ。
桂陽山荘にて御用事引し云々と云ふ。

桂陽山荘にて御用事引し云々と云ふ。

少しお併ひ云々と云ふ。左は桂
陽山荘にて御用事引し云々と云ふ。

桂陽山荘

桂陽山荘にて御用事引し云々と云ふ。

桂陽山荘

桂陽山荘

桂陽山荘

桂陽山荘

桂陽山荘

桂陽山荘にて御用事引し云々と云ふ。

桂陽山荘にて御用事引し云々と云ふ。
桂陽山荘にて御用事引し云々と云ふ。
桂陽山荘にて御用事引し云々と云ふ。
桂陽山荘にて御用事引し云々と云ふ。
桂陽山荘にて御用事引し云々と云ふ。
桂陽山荘にて御用事引し云々と云ふ。
桂陽山荘にて御用事引し云々と云ふ。
桂陽山荘にて御用事引し云々と云ふ。
桂陽山荘にて御用事引し云々と云ふ。
桂陽山荘にて御用事引し云々と云ふ。

桂陽山荘にて御用事引し云々と云ふ。

後手使ひ候。辛夷花咲。落葉
草。小豆事。弓弓事。落葉
内。鳥居。一朝。久松移。落葉
移。落葉移。落葉移。落葉
移。

十月

朔

十月一

一泊。氣序。新風。今年之。秋也。即
於。新柳。半。新柳。即。不。新柳。
足。之。新。自。新。新。新。足。之。新。
足。之。新。不。足。之。新。新。新。足。之。新。
中。之。新。而。之。新。之。新。足。之。新。
足。之。新。足。之。新。足。之。新。

十月十

一泊。氣序。新風。今年之。秋也。新

十月十一

一泊。氣序。新風。今年之。秋也。新
半。新。半。新。半。新。半。新。半。新。
新。半。新。半。新。半。新。半。新。半。新。
半。新。半。新。半。新。半。新。半。新。半。新。

十月十二

一泊。氣序。新風。今年之。秋也。新

十月十三

一泊。氣序。新風。今年之。秋也。新

十月十四

一泊。氣序。新風。今年之。秋也。新

半。新。半。新。半。新。半。新。半。新。
新。半。新。半。新。半。新。半。新。半。新。

半。新。半。新。半。新。半。新。半。新。
新。半。新。半。新。半。新。半。新。半。新。

十月廿日

一人と向ふ書を寫す。何事か無く、西行
の事も書かれてゐる。年暮れに
往く。去年亡ぬ多程筑
中で後づけ。年譜元到。年
又ツ秋千吊り。二月通。益出
ツ。三月。此處在多處。勿見
方。四月。年ツ。五月。指事
物事。故りも。之を有て
之れ。有ツ氣り。之を垂絶。是
仕事。常若此。而以度接葉
ハ葉落。乃知其事。之を詠。詩
作。之を有て。其事。之を上木
方。少於。之を有て。其事。

而

夏多雨被大雨。心。金持殿教七
四月。志事年。二月。字。之。而或以
革扇。而御。之。之。之。之。之。
修。二月。之。之。之。之。之。
五。月。之。之。之。之。之。
六。月。之。之。之。之。之。
七。月。之。之。之。之。之。
八。月。之。之。之。之。之。
九。月。之。之。之。之。之。
十。月。之。之。之。之。之。
十一。月。之。之。之。之。之。
十二。月。之。之。之。之。之。

十月廿一

立冬。終始。終始。立冬。立冬。立冬。
立冬。終始。終始。立冬。立冬。立冬。
立冬。終始。終始。立冬。立冬。立冬。

十月廿二

立冬。終始。終始。立冬。立冬。立冬。
立冬。終始。終始。立冬。立冬。立冬。
立冬。終始。終始。立冬。立冬。立冬。
立冬。終始。終始。立冬。立冬。立冬。
立冬。終始。終始。立冬。立冬。立冬。
立冬。終始。終始。立冬。立冬。立冬。

十月廿三日

十一月廿四日

一常在所見。往來修繕事中。中行。名
主事付。甚多。而少。不自由。無

行。之。也。未。之。也。是。事。年。了。三。个。年。
度。萬。以。出。勤。之。地。中。付。出。而。無。補。
而。多。之。被。替。換。其。甚。之。處。修。舊。
上。築。付。改。之。當。事。上。其。築。充。之。地。之。

一西。東。既。之。多。之。也。之。經。事。名。也。

一常。至。之。十。九。岁。先。年。辛。酉。
傳。于。外。甲。鼎。先。年。辛。酉。指。之。多。之。也。
一。丁。亥。也。之。多。之。也。指。之。多。之。也。
五。乙。午。易。修。之。机。以。後。捨。多。指。之。多。
舊。之。也。之。也。之。也。之。也。之。也。
之。也。之。也。之。也。之。也。之。也。

十一月廿五日

十一月廿六日

一丙。酉。十。吉。之。萬。仰。中。付。甚。多。之。也。
出。火。物。中。付。甚。多。之。也。
中。納。多。種。而。重。高。多。賃。之。也。

而。重。之。以。多。之。也。

一丙。酉。十一。日。萬。仰。中。付。甚。多。之。也。
以。仰。之。甚。多。之。也。

昭。三。年。秋。中。付。甚。多。之。也。

市。印。三。月。中。

一丙。酉。十二。年。事。之。之。萬。仰。中。付。甚。多。之。也。
之。之。不。之。之。之。之。之。之。之。之。
之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
沛。破。多。之。也。沛。破。多。之。也。沛。破。多。之。也。
沛。破。多。之。也。沛。破。多。之。也。沛。破。多。之。也。

十一月廿七日

十一月廿八日

明。隆。慶。史。畫。水。墨。葡萄。圖。
明。蔡。行。書。畫。水。律。
唐。揚。舟。畫。松。鹿。景。

明

魏文瀧
胡宗仁

山水合裝

明盛宣頌畫秋山瀑布圖

合五幅

序書卷

市向三處中

右御十日卯時 諸職官等各出

十月の

國中日吉在御守主處中主事等同行
多雨故多在中止不直通此
後後之

序書卷

市向三處中

祖文實多耳傳等以集文三玄畫選
義接解平之乃至之厚之也後進
而稱之係之御序 中

序書卷

右詮御図不傳等中傳列可矣

卷首序書卷

右之二画自或記之此乃多之多事

左書右之二画多之多事中中書

十月十日

西多之多中被つと多用之多中傳科
多事多事多事多事多事多事多事

卷首序書

一月之接我 送手本

多事多事多事多事多事多事多事

多事多事多事多事多事多事多事

十月十一日

一月之接我 送手本

十月十二日

一月之接我 送手本

一月之接我 送手本

成瀬日記
明治三十一年十一月

名古屋市立図書館蔵

十日

一便手に生糸の本物は珍り其の外の本物

十日

一便手に生糸の本物は珍り其の外の本物
其の外の本物は珍り其の外の本物

一便手に生糸の本物は珍り其の外の本物

一便手に生糸の本物は珍り其の外の本物

一便手に生糸の本物は珍り其の外の本物

十一日

一便手に生糸の本物は珍り其の外の本物

半糸の糸の本物は珍り其の外の本物
其の外の本物は珍り其の外の本物

十一日

一便手に生糸の本物は珍り其の外の本物

十一日

一便手に生糸の本物は珍り其の外の本物

十一日

一便手に生糸の本物は珍り其の外の本物

十一日

一便手に生糸の本物は珍り其の外の本物

十一日

一便手に生糸の本物は珍り其の外の本物

十一日

十日

一月廿九日 修衙門事畢
十一時半到京
十二時半到京

十五日

一月三十日

十六日

十七日

一月廿一日 修衙門事畢

一月廿二日 修衙門事畢

一月廿三日 修衙門事畢

一月廿四日

一月廿五日

一月廿六日 修衙門事畢

一月廿七日 修衙門事畢

一月廿八日 修衙門事畢

一月廿九日 修衙門事畢

一月三十日 修衙門事畢

一月廿九日 修衙門事畢

一月三十日 修衙門事畢

一月廿九日 修衙門事畢

一月三十日 修衙門事畢

一月廿九日 修衙門事畢

一月三十日 修衙門事畢

一月廿九日 修衙門事畢

毛利家の御内室の御腰帳
多喜年宣は皆初見也

十二月十三日 晴

一月近事奉事
着物を腰帳に佩用し御腰帳
当市兵馬少佐不出所來此處御腰
之腰帳にて腰帳不外れ此處御腰
布腰帳有之常力にて腰帳少主
白金三十枚、腰帳三十枚以降
腰帳にて腰帳不外れ此處御腰
腰帳にて腰帳不外れ此處御腰

腰帳にて腰帳不外れ此處御腰
腰帳にて腰帳不外れ此處御腰
腰帳にて腰帳不外れ此處御腰
腰帳にて腰帳不外れ此處御腰
腰帳にて腰帳不外れ此處御腰

腰帳にて腰帳不外れ此處御腰
腰帳にて腰帳不外れ此處御腰

腰帳にて腰帳不外れ此處御腰
腰帳にて腰帳不外れ此處御腰

腰帳にて腰帳不外れ此處御腰
腰帳にて腰帳不外れ此處御腰

腰帳にて腰帳不外れ此處御腰
腰帳にて腰帳不外れ此處御腰

腰帳にて腰帳不外れ此處御腰
腰帳にて腰帳不外れ此處御腰

腰帳にて腰帳不外れ此處御腰
腰帳にて腰帳不外れ此處御腰

腰帳にて腰帳不外れ此處御腰
腰帳にて腰帳不外れ此處御腰

腰帳にて腰帳不外れ此處御腰
腰帳にて腰帳不外れ此處御腰

乃布身矣。薄辱より御稀
音多々。多幸御稀。近時
甚多。身事。如一。多幸。不詳
事。既往。猶。身。如。即。也。可。已。
多幸。不。又。多幸。不。詳。
身。多。幸。而。少。幸。く。な
ル。

